
笑い日和。

大野さいころ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

笑い日和。

【Nコード】

N1856BA

【作者名】

大野さいころ

【あらすじ】

剣も魔法もバトルもないが、幼馴染あり駄妹ありハーレムありの学園コメディ。力を抜いて読んでいただきたいです。たまにショートストーリーも投稿します。

投稿は不定期です。

#1 いつもの風景。(前書き)

はじめまして。大野さいころと申します。

到着地点を見つけないまま出発してしまったので道に迷うかも知れませんが、

どうか温かい目で見守っていただければ嬉しく思います。

#1 いつもの風景。

気がつくと見たこともない場所にいた。

……なんてことはまったくなかった。

ここは2・B、つまり俺 大藤功こうちゅうがつい先日、四月の頭からいるクラス。

そういえば授業中だったっけ？

まあ少しうとうととしてしまうのはおそらく学生なら誰しも経験があることだし、特に気にしないで教科書とノートの確認をしようとしたところであることに気がついた。

静かすぎるのだ。

いや、授業風景としてはこれ以上ないくらい正しい状況だけど。

このクラスに限っては静かすぎることは異常なのだ。

普段はあまり真面目な生徒がいないのかコソコソ話したりゴソゴソ何かしている音がするのがこのクラス。

授業なんて真面目に受けるのは真面目な委員長とその他少数だ。

周りにクラスメイトがいるから寝てる間に教室移動があつたわけでも、皆が急に真面目になったわけでももちろんないだろう。

俺が一人疑問に思っていると、後ろから背中をシャーペンで小突かれた。

伊藤恵いづみ。クラスメイトであり、俺の親友でもある女子。

恵とは去年知り合い、どうしてだったかわからないが意気投合して

仲良くなり現在にいたる。

現在席は俺の後ろで、授業中もよく今みたいに背中を小突かれるのでいつもなら特に驚いたり声を上げたりはしない。

そう、いつもならである。

「痛いわ!!!」

授業中ということ忘れて反射的に振り向きながら恵に怒鳴った。いつもなら芯はしまって小突いてくるのに今日は思いっきり出てるようだ。

背中にチクつとした痛みがまだ残ってる。しかもなんか一か所じゃなく全体的にチクチクしてるんだけど…
というか、背中に刺さったってことは…

「ワイシャツ貫通してるじゃねーか!!恵、なんで今日は芯」

しまつてないんだよ、と俺が続けようとしたら恵に

「(前!前!)」

とジェスチャー付き口ぱくで伝えてきた。

なんだろう?と思い、その仕草が馬鹿みたいだなーと場違いなことを考えながら前を向くと

「モンスターがいた」

モンスターがいた。なぜか青筋をたててるし。後ろで恵が「思ったこと口に出しちゃってるし…」とか言ってるが何の事だかわからない。

このモンスターは分類では人間で、国語教師の通称『体育』。

文系の教師のくせに筋骨隆々で見た目は完全に体育会系。

ちなみに中身も体育会系。

怒らせるとかなり怖いと評判の先生だ。

ちなみに顔も怖い。

ここまで考えて めちゃくちゃ失礼なことを やつと理解した。このクラスが異様に静かで、恵が俺に何を伝えたかったのかを。そこまでわかって嫌な汗がたらだら出てきた…。そしてモンスターが動きを見せようとした時、

「殺さないで下さい!」

おもいつきり叫んだ。命がかかっているんだ。恥がどこのどこの言
つてられない。

しかし後ろのほうで笑ってるやつはちゃんとあとで制裁しよう。
俺が生きていればだが…

「誰が殺すか！お前は俺をなんだと思っているんだ！」

「えっと…。やさしい国語教師だと思っています」

「さっきモンスターって言うておいて、よくそんなことが言えるな
！」

「心を読まれていた!？」

「口に出して言うてたわ!…まあいい。何か言い訳とかはあるか？
一応あるなら聞いてやるう。」

「なぜ体育の教師にならなかつたんですか？」

「余計な御世話だ！廊下に立ってる!!」

笑い声が聞こえる中、すごすごと廊下に出ていく俺。
廊下に立ってるだけにどんな意味があるのかを誰かに聞いたかつた
が、そんな仲間は授業中の廊下には誰もいなかった。

ただ立っているだけの、暇な間少し考える。

俺が通ってるこの学園は『私立国際学園高等部』。
国際とつくだけあって、二年生のクラスには毎年五月の中頃から留
学生が来る。

どのクラスに来るのかわからないが、面白いやつだとうれしい。
ちなみにクラスは2 - B。A ~ Eまでクラスがあり、一クラス40
人程度の普通規模の学園だ。

また、すぐ近くに『私立国際学園中等部』があり、俺は一昨年までそこに通っていた。

ちなみに中学には現在俺の妹が通っている。

きつと再来年には妹もこの高校に上がってくるだろう。

高等部には受験なしで来れるありがたいシステムがあったので、中学からの顔見知りもかなり多い。

もちろん外部から受験してくる生徒もいる。そういう生徒はやはり、留学制度などに興味があるのだろうか。

ちなみに俺は留学なんぞに興味はない。ここに来たのも受験なしという甘美な響きに誘われたからだ。

しかしそんな俺でも今ではこの学園をかなり気に入ってる。

というのも、不良がないからだ。

不真面目な生徒はいるが、不良はいない。

ちなみに今住んでるこの町自体治安がかなり良い。

そんな環境を俺はかなり気に入っている。

荒波立えず、平穏でそれなりに楽しい生活ができてる今を大切にしたいと思っている。

これからも仲の良い友達と、楽しい時間を過ごしたい。

キンコーンカーンコーン…

チャイムが学校中に鳴り響く。

授業が終わり、廊下にもいろいろなクラスの活動音が聞こえてくる。俺はさっそくいつものメンバーに混ざるために、教室に入ろうとしたが

またもやモンスターに出くわした。

よく考えれば当然だ。

モンスターに追い出され、教卓側のドアから入ろうとすればモンス

ターに会うのは必然だった。

しかし、さつきまで悦に入って自分の考えに浸っていたのですっかり忘れていたのだ。

「大藤、これから一緒に昼休みを過ごそうか。反省文ならおごってやるから」

「ありがとうございます。けど遠慮し」

「遠慮なんかするな。」

「いえ、遠慮」

「するな」

「はい…」

強制だった。笑顔が不気味すぎて怖かった。

こうして俺は昼休みを失ってまでモンスターと過ごすことになってしまった。

教室からニヤニヤと見てくる悪友らを恨めしく思いながら、反省文を食べに行くのだった。

「肉じゃが」（前書き）

本編とはまったく関係ないです。

あらすじにショートストーリーもあり、と書きましたがこれがそうです。

以後も今回と同じように、サブタイトルに関連する話をショートストーリーとして

投稿するつもりです。

ちなみになぜ肉じゃがかと言いますと、作者が実際に知人と肉じゃがについて

話していたからです。毎回ショートストーリーのサブタイトルはこんな感じで

決まりますので、深い意味などはないのであしからず。

何度も言いますが、本編とはまったく関係ありません。

「肉じゃが」

功「恵よ。肉じゃがの『じゃが』って何か知っているか？」

恵「じゃがいものことでしょ？」

功「そうだ」

恵「なんかすごい偉そうにしゃべるね？」

功「意味はまったくないがな」

恵「じゃあやめようよ……」

功「あれ、恵には不評だったか？」

恵「うん、なんかイラっとしちゃった」

功「そ、そうか……。笑顔がなんか怖いんだが……」

恵「そんなことないよー。っていうか、すでに誰かに試したの？」

功「ああ、美香にな。あいつはすごい喜んでくれたんだけどなー」

恵「あー美香ちゃんにか。なるほどねー」

功「なにがなるほどなんだ？」

恵「美香ちゃんブラコンだから、功くんのやることなすことなんで

も嬉しいんだよ」

功「さすがにそれはないと思うけどなあ。けどよく考えたら喜ぶつても確かにおかしいな」

恵「でしょ？まあそれはいいとしてさー」

功「うん？」

恵「結局なんだったのかなーと思って」

功「??？」

恵「そんな本気でわからないって顔されても困るんだけどなー」

功「ああ！なんであんな偉そうにしていたのかってことか？」

恵「違うよ！肉じゃがの話！」

功「ああ…そんな話もあったな」

恵「なんでそんな昔のことに…」

功「いやーさっきの恵の顔が般若みたい」

恵「ニッコ」

功「なんてことはなくただ俺がど忘れしただけでしたごめんなさい！」

恵「もう。で、肉じゃがの話は結局なんだったの？」

功「あーうん。今日食べたいなあと思ったただけなんだけど」

恵「それだけ!？」

功「恵よ。肉じゃがが食べたいぞ」

恵「もういいよそのキャラは!！」

功「ふふふ。ふははははははは!！」

恵「ニコっ」

功「クレープはいかがですか、姫様」

恵「態度変わりすぎだよ!そんな怯えなくても…」

功「冗談だよ。すいません、イチゴクリーム味のクレープ一つください」

恵「いいの!？」

功「今日だけな」

恵「ありがとー!！」

店員A「やっといきましたね……」

店員B「ええ。クレープ屋の前で肉じゃがの話をはじめた時はびっくりしたわ……」

店員A「しまいにはコントみたいなこと始めちゃったしね……」

店員B「けどとっても仲よさそうなカップルだったわね……」

店員A「羨ましいわ……」

店員B「ホントにね……」

店員A & B「はあ……」

この日、功と恵の何気ないやり取りで二人のクレープ屋店員が憂鬱にさせられたのだった。

「肉じゃが」(後書き)

結局肉じゃが関係なかったというオチでした。

もはやサブタイトルの意味がない気もしますが、あまり気にしないでください。

「サントクロース」(前書き)

本編がまだ進んでないのでキャラが二人しか使えないという不便極まりない状況です。

「サンタクロース」

功「サンタって無駄な労力を使ってると思わないか？」

恵「唐突に話し出したねー」

功「まあ付き合ってくれよ」

恵「いいよ。で、一体サンタのどのへんが無駄だと思うの？」

功「まず服装かな。煙突よじ登ったりするにはあのもこもこした服はよくないだろ」

恵「うーん確かに。けど動きやすい服装にした場合、煙突よじ登ったりしてるところを見られたらそれはただの変質者に見えないかな？」

功「そうだな。けどその問題は簡単に解決できる」

恵「そうなの？結構難しい問題に思えるけど」

功「サンタって子供に欲しいものを的確に与えるだろ？つまり、それぞれの住所を特定できるすべを持っていることになる。だから郵送すればいいんだよ！そしたら誰にも姿は見られない！」

恵「なんでそんなに興奮してるの？」

功「むしろ現金書留でいいよ！現金なら自由度が高いし、万が一欲しいものが直前に代わっても対応できる！」

恵「それは夢がなさすぎるよ!!」

功「しかもあいつはトナカイがいなければただのオッサンだしな！
飛んでいるのはトナカイであってあいつはそりに座ってるだけだからな！感謝しろよトナカイに！」

恵「だからどうしたの!?!サンタに恨みでもあるの!?!」

功「しかしなるほど。ここまで考えてわかったけどあえて動きづらい服装をし、現金ではなく物を送り、トナカイを操り移動するのはすべて演出だったのか。まったく、サンタも中々粋なオヤジだな！」

恵「もうついていけないよ！」

#2 いつもの風景。2（前書き）

閲覧どうもありがとうございます。

何話か書きためてはいるんですが、中々作品の中の一日が終わらなくて困っています。予定ではこの回で一日が終わるはずだったんですが…。

楽しんでいただければ嬉しいです。

#2 いつもの風景。2

反省文も無事終わり、午後の授業も終わった放課後。

何をするでもなく、帰るわけでもなく、何となく集まっている3人の影。

一人は俺、大藤功だ。

一人はこの中唯一の女子で親友の、伊藤恵。後ろの席でニコニコして椅子を傾けて遊んでいる。

どうでもいいけどかなりあぶなつかしい。そして楽しいのかそれ？そして最後の一人、黒川悟は馬鹿代表だ。

「黒川悟は馬鹿」

「急に罵倒すんのやめてくれよ!?!」

「黒川悟はオタク」

「否定はしないけど改めて言われるとムカつく!」

「黒川悟はブサイク」

「女子に言われるとマジで傷つくよ!?!」か伊藤も功に乗るなよ!」

「黒川悟は」

「もういいでしょ!?!そんなに俺の心を傷つけて楽しい!?!」

「全然?」

「じゃあやめてよ！なんで無駄にそんなことすんだよ！？」

「「暇だから」」

「僕たちホントに友達なのかな…？」

「「…」」

「黙らないでよ！…まったく、功と伊藤がそろつと手に負えないよ。前だって…」

悟は愚痴をこぼすようにぼそぼそ何か言い始めた。

こんなときの悟は中々戻ってこない。さすがにやりすぎたかな？
どうにも恵といると悪ノリしてしまう傾向があるなーと自己分析している。

「昼はお疲れさまだったねえ」

と恵に気の抜けるような声で話しかけられた。

「まったくだ。それにしてもちつとも助けってくれなかったな？」

少し責めるような眼をして言ってみる。

「だって功くんってば全然起きないんだもん」

全然気にせず、そしてなぜか若干悲しそうな顔で言ってくる。
というか起こそうとしてくれたのか…。悪いことしたなあ。

「そっか。ごめんな？お詫びに帰りになんか奢ってやるよ」

「ホントに！？じゃあじゃあクレープとアイスとハンバーガーと」
「どんどん出てくる食べ物の名前。恵は小柄だがよく食べるのだ。
「っかその小さい体のどこにそんなに入るんだよ、と疑問に思わざ
るを得ない。」

「ポテトにジュースでしょ？あとは」

「太るぞ？」

恵がさらに何か言おうとしたところで、女子に効果抜群な言葉を浴
びせる。

恵はよく食べるが、別に食べても太らないわけではないのだ。

「うっ…」

言葉に詰まる恵。そして追い討ちをかける俺。

「だるまみたいになるぞ？せっかくかわいいのに」

「うっ…えっ？」

「えっ？」

「あ、いや…っっていうかだるまってひどくない！？」

「あ、ああ。なりたくなかったらどれか一個にしとけて」

恵の何かよくわからない勢いに若干押されつつも、自分の財布のた

めに提案する。

「うう、わかったよ。じゃあクレープ」

「りょーかい」

「3個ね」

「結局!？」

3個も食べるの!？

予定外の出費が…。今日は結構金使う予定あるのに大丈夫かな…。
まあもう決まっちゃったので切り替えよう!

きつとどこかでこの分の金が戻ってくると信じて!

と、およそ現実的でない期待を抱いてると

「早くいこーよ!」

と急かされる。

食べ物が絡むと恵は子供っぽくなるなーと苦笑していると手を引つ張られた。

「功くん、おいていくよ?」

「おいていく気ないじゃん!」

めっちゃ力強いよ!?!簡単に引きずられてるよ!?!

「い・い・か・ら!」

「わかったから引つ張んなって！」

自らも足を進めると、まだぼそぼそと何か言ってる悟が目に入った。まさかあれからずっと？なんかちよつと怖いし。まあおいてく気もないので声をかける。

「悟、いくぞー」

「だいたい功は中学から…って、え？どこに？」

「だから、クレープ屋」

「いつのまにそんな話に!？」

ちっとも聞いてなかったのかよ。

「さっきの聞いてなかったのか？悟のおごりでクレープ食べるって話」

「聞いてもないし了承もしてないのに決定してんかよ!？」

悟は正当な抗議をしてくるが、とりあえず無視を決め込む。

「行くか」

「無視!？なんか今日冷たくない!？」

そうかな？いつもこんな感じだと思っけど…

しかしよくよく考えたらなんか可哀そうになってきた。

だって俺からだけじゃなく、大抵の人は悟には似たような対応をするんだぜ？

もしかしたらこいつは結構寂しい思いをしてるのかもしれない…。俺は携帯を一回取り出し、少し操作して時間を確認し机に置いた。

「ごめんな。今日からは俺だけは優しく接してやるから。そうだな、まずは一緒に登校するか？」

「急に何で!？」

唐突に言われた内容に悟は驚嘆していた。恵もなにがなんだかわからないような顔をしている。

「功くん、なんで悟なんか優しくするの？」

恵は相当ひどいことを言っているが、今はそんなことはどうでもいい。

「こいつはきつと優しさに飢えてると思うんだ」

「優しさ?」

恵は頭に?マークを浮かべてる。

しかし、俺が一瞬だけ目線を置いた携帯に移すと恵は「ぷっ」と笑い、頷いた。

「俺らは悟に対して自然に冷たい態度を取ったりしてること気づいたんだ。しかしこれからもそれが続くと悟が耐えられるかどうかわからないじゃないか」

「え？いや僕は別に…」

「もういいんだよ、悟」

俺は朗らかに笑いかける。

すると恵も俺に合わせて優しい口調で話しかける。

「そっか、そうだね。今までごめんね？これからはもういじったり冷たい態度とか取らないからね？」

「俺もだ。今まで気づけなくてごめんな？他のみんなにも言うっておくからさ」

俺と恵は今きつと爽やかな笑顔を悟に向けているだろう。

「い、いや遠慮しておくよ。僕は今まで通りでも大丈夫だからさ」

拒む悟を恵と二人で畳み掛ける。

「お前が心配なんだ、悟」

「そっだよ？今日からはもう何も心配しないでね」

「だからっ！…！」

悟が大声で何か言おうとしている。

やっとか、と思ひ恵を見ると、すでにちよつと笑っていた。

「僕は優しくされたいわけじゃないからっ！…！むしろ功からは優しくされるより冷たくされる方が嬉しいよ…！」

悟の思いは教室中に響いた。

きつと今こいつは自分が言ったことをちゃんと理解していないだろう。

俺は携帯を手に取り、操作しながら悟に言った。

「そうだったのか…。全然気が付かなくてごめんな？」

「わかってくれればそれで」

いいんだ、とおそらく悟がそう続けようとしたところで、ピツという無機質な機械音が聞こえた。

俺の携帯から。

そして数秒後に先ほどの再現がなされた。

『むしろ功からは優しくされるより冷たくされる方が嬉しいよ！！』

……。

恐ろしいくらいの静寂が教室を覆った。

「知らなかったよ。お前、ホントに だったんだな」

「今まで功くんに苛められて喜んでたんだねっ…っわぁ…」

軽蔑の視線をダブルで浴びせる。

「違う！今は違うから！」

「……………」

「……………」

「そんな目で見ないでくれ！」

「興奮するのか？」

「しないよ！って伊藤も本気で引かないですよ！」

「だってえ…。MでB…って…」

「勝手にB…追加しないでよ！」

「恵、いじめても喜ばすだけだぞ」

「もういいよ！帰る！今日は帰るから！」

そう言ってホントに帰ろうとする悟。

さすがにちよっとやりすぎたかな？

「悟！ちよっと待て！」

「……………」

悟は無言で振り返る。

やはりやりすぎたのか、若干目に涙が浮かんでいる。

俺はそんな悟にやさしく言った。

「悪い。帰るならクレープ代だけ置いてってくれないか？」

たっぷり三秒後。

「もうやだあああああ！」

悟は猛ダッシュで帰って行った。

「さて、クレープ食いにいくかー」

「功くん、鬼だねえ」

そんな恵の眩きを背に受けつつ、教室を出るのだった。

「タイトル」(前書き)

閲覧ありがとうございます。

ショートストーリーは何も考えずに書けるので投稿頻度は高くなっています。

ただ内容はどうでもいいことしか書いてないです。

「トイレ」

悟「どこ行ってたの？」

功「ちよつとな」

悟「トイレでしょ」

功「なんで知ってる？ ストーカーか？」

悟「なんで真つ先にその疑いを持つかな！？」

功「いやだつて、なあ？」

悟「その「しょうがないじゃん？」みたいな顔やめろ！ Yシャツが出てたからわかったただけだよ！」

功「あーホントだ。気付かなかったわ」

悟「しまわないと怒られるよ」

功「そうだな。ところでなんでうちの学園ってウオシュレットがあるところもないところがあるんだ？」

悟「確かに二階のトイレにはほとんどないね」

功「職員室前のトイレにはあるよな。あれは羨ましい」

悟「僕はウオシュレット使わないから別にいいかな」

功「なんで使わないんだよ!？」

悟「なんで怒ってるかわからないけど、あれってくすぐったいから好きじゃないんだよね」

功「いやむしろ気持ちいいだろ」

悟「いやいやお尻に水を直接かけられて気持ちいいとか考えられないよ」

功「そうやって改めて言われると変態っぽいけどな、あれはやっぱり気持ちいいよ」

悟「見解の相違があるみたいだね？」

功「俺は譲れない。お尻がきれいになって気持ちいいなんて一石二鳥だろ！」

悟「あれは気持ち良くないね!くすぐったくて我慢できないよ!」

恵「…」

功「恵!いいところにいた!ちょっと聞きたいことが」

恵「男の子二人で…お、お尻が気持ちいいとか我慢できないとか…やっぱりそういう関係なの?」

悟「ちがちがうよ!」

功「どもるな！信憑性が薄まるだろ！あと恵やっぱりってなんだよ
！？」

恵「大丈夫だよ！私は！ギリギリ許容範囲だからあー！！！！！」

功「そんなこと聞いてない！ってちょっと待て！話聞いてくれ！お
願いだから待ってー！！！」

「トイレ」(後書き)

自分でも何書いてるんだろうつと思います。

「講話」(前書き)

閲覧ありがとうございます。

「電話」

功「すごい話してもいいか？」

恵「いいよー」

悟「いいけど、なんか漠然としてるね？」

功「聞けばわかる」

悟「ならいいけど。で、どんな話なの？」

功「ああ。これは前にうちに電話がかかってきたときのことなんだが」

以下回想（電話相手はA表記）

功「もしもし大藤ですけど」

A「こちら〇〇会社のAと申します。お父様かお母様はいらっしゃいますでしょうか？」

功「すみません。どちらも今いないので自分が用件を伝えておきましようか？」

A「ありがとうございます。それではメモなどを用意していただいてもいいでしょうか？」

功「わかりました。ちょっと待っててください。」

A「はい」

功「メモはぐつと。あつたあつた。もしもし？」

A「……………」

功「あれ？もしもし？…ん？電話越しに何か聞こえるな」

A「…………だから私じゃないんですって！それと今電話中なんでちょっと待っててください！」

？「…………お前以外に誰がいるんだ！だいたい上司との話途中に電話なんかしてるな！」

A「…………お客様への電話なんですから待っててください！」

？「…………ちよつと電話かせ！」

A「…………つあちよつと！」

？「申し訳ありません。今忙しいので電話切らせていただきます！」

功「え？あの…今そちらから電話かかってきたんですが用件だけでも」

ガチャッ。ツーツーツー…

美香「あれ？おにーちゃん子機握って何してんのー？」

功「いや、何もできなかつたんだよ……」

美香「へ？」

功「気にするな。それより何か用か？」

美香「うん！今日もお兄ちゃんとお風呂入ろうと思って！」

功「いつも一緒に入ってるみたいに言っても駄目だからな？」

美香「ちえー。じゃあ早くキスして？」

功「どういうこと！？じゃあの意味が全くわからない！」

美香「兄は妹にキスしなきゃいけないんだよ！」

功「そんな決まりは絶対ない！全く、冗談もほどほどにしろよ？」

美香「はーい。まあ、私たちいつも寝てる間にキスしてるもんね？」

功「それは夢でつてことか？それとも俺が寝てる間ってことか！？
つてか冗談だよな！？」

美香「キスしてくれたら教える！」

功「本末転倒じゃねえか！」

以上回想終了

功「つてことがあつてな」

恵「たしかにすごいねー」

悟「うん。そんなことがあつたんだ…」

功「さすがにびっくりしたよ」

恵「私もー。まさかねえー」

悟「ああ、まさかなあ…」

恵&悟「功（くん）がそんなにシスコンだったなんて…」

功「そつち！？電話の話がメインなんだけど！しかもシスコンじゃないし！」

恵「いやあ電話の話も驚くけどさ、仲良いのは知ってたけど兄妹ですごいことしてるんだなーと思ってさー」

悟「インパクトが強すぎて電話の話が大したことじゃなく思えるな」

功「そんなにか？美香がいつもあんな感じってことは知ってるだろ？」

恵「キスまで進んでるってことは知らなかったなー」

功「それは美香の冗談だつて!.....多分」

悟「うちの妹じゃ天地がひっくりかえってもあり得ないよ。ただでさえ会話があんまりないのに」

功「それはお前が奈央ちゃんに嫌われているだけだ!」

悟「うつ。そんな直接言わなくても...」

恵「黒川が奈央ちゃんに嫌われているのは周知の事実でしょー?」

悟「ひどいや...」

恵「功くんもシスコンなのはわかるけどももう少し節度を持って生活しなきゃ!」

功「違うっつってんだろ!どう考えてもおかしいのは美香だろう!」

恵「けど時々断りきれなくて一緒に寝てるんでしょー?」

功「それは...ってなんで知ってたんだよ!?」

恵「美香ちゃんが言ってたよー」

功「あいつが俺のシスコン疑惑の原因か!」

恵「疑惑じゃなくて事実でしょー」

悟「妹に好かれてる分他の人から嫌われてよ!」

功「妬むな！嫌に決まってるんだろ！」

恵「結論！功はシスコン、黒川は妹に嫌われている兄略して嫌兄！」

功&悟「勝手にしめるな！！」

「電話」(後書き)

電話の話は作者の体験談だったりします。

#3 いつもの風景。3 (前書き)

閲覧ありがとうございます。

全然進まないです。

#3 いつもの風景。3

「いつものところでいいか？」

「いいよー。あそこのクレープおいしいから！」

悟が走り去った後、恵と二人でクレープ屋に向かっていった。学園から少し歩いたところにある公園に女性に人気のクレープ屋があり、そこに向かっていている途中だ。

「あー!!！」

声のほうに顔を向けると、結構遠くに中等部の制服を着た女の子三人組がいた。

そのうちの一人が凄い大きな声で叫びながらこっちに走ってきている。

「おーい!!おにーちゃん!!！」

残りも二人も続いて走ってきた。

「ちょ、待ってよ美香!ほら、奈央も行くよ!」

「美香ちゃんも香奈ちゃんも走るの早いよ!」

別に走ってこなくてもいいのになあと恵に苦笑すると、

仕方ないよーと同じく苦笑している。

仕方ないってなんでだ？

恵に聞いてもはぐらかされ結局わからずじまいだったので釈然としないが、考えてもわからなかった。

それにしてもこの三人組はいつつも一緒だなあ。

仲良しで微笑ましいと思っていると、先頭を突っ走っていた我が妹美香が勢いを殺さずに突進してきている。

「お、おい美香！そろそろ速度落とせつて！」

「お兄様兄さん兄者ー！！！！！」

「頭大丈夫か！？」

わけのわからないことを叫びながらもいまだ止まらない妹。そして目の前まで来たかと思うと

「妹ダイブ！」

言葉通りにダイブしてきた！？

「なんの！兄キャッチ！」

避けると怪我をするかもしれないと思い、キャッチを選択した。しかし、つられて俺もまでテンションがおかしなことになっている。

「さあこい！絶対受け止めグフツ！…やる…ぞ…」

「お兄ちゃんありがとー！さすがお兄ちゃんだね！」

俺に抱きついてご満悦な美香。
妹に抱きつかれてぐったりしている俺。
実に対照的である。

「功くん！？大丈夫！？」

「やっと追い付いた！もう美香急につて功先輩！？」

「功さん！？大丈夫ですか！？」

「うふふ…。ふふふふふふ…」

「こわっ！功くんめちやくちや怖いよ！」

恵が何か恐ろしいものでも見たかのような反応をする。

うふふ。一体何に怯えているのかしら？

思考がなぜかオネエになりかけていたが、泣きそうなほど、という
か既に半泣きになっている奈央ちゃんが目に入り一気に覚醒した。

「はっ！！—瞬意識がとんでた気がする…。そして腹がめちやくち
や痛いんだが…」

「功先輩大丈夫！？さっき急に不気味な笑いを漏らしてたけど」

「ああ、よく覚えてないけど腹以外大丈夫みたいだな。心配してく
れてありがとう香奈ちゃん」

「そりゃ心配もしますよ。ホントにぐったりしてたし。…それに功

先輩のことだし」

「え？」

「ななななんでもない！」

急に慌てる香奈ちゃんだが、俺にはさっぱり理由がわからなかった。そして先ほど半泣きしそうになっていた、そしていま今は泣いている奈央ちゃんに顔を向ける。

「奈央ちゃん、泣かないで」

「だって、ひくつ、功さんが…」

「奈央ちゃんは優しいなあ」

いまだに抱きついてる美香を引っぺがし、奈央ちゃんを抱きよせる。騒ぐ妹は無視する。

ちなみにこんな大胆とも思えることをするのは奈央ちゃんは美香ともよく一緒にいるせい。妹の様に思えてならないからである。

「ひくく…」

「ありがとう。けど、奈央ちゃんが泣いてると俺も悲しいよ」

「功さん…。無事でよかったです」

「奈央ちゃん…」

「功さん…」

「（反応が私たちと全然違う…）」

恵と香奈ちゃんが不機嫌そうな視線を向けてきてるが、今は気にならない。

奈央ちゃんの頭を撫でる。奈央ちゃんも嫌がるそぶりもなく受け入れてくれる。

なんて良い子なんだろうか！

「ちよつとちよつとお兄ちゃん！なにしてんの！？」

まだ騒ぐ妹。

「兄が抱き寄せていいのは妹だけなんだよ！」

「はいはい。奈央ちゃんホントにありがとう」

「おざなりっ！？兄は妹を無視しちゃいけないんだよ！」

奈央ちゃんをそつと離すと、少し名残惜しそうな顔をする。なんてかわいい子なのだろうか！

「こんなに良い子でかわいいのになんで…」

「功さん…恥ずかしいです…／／」

「なんで悟の妹なんだ！」

そう、奈央ちゃんは悟の妹。

間違っことなく悟の妹。黒川奈央。

「なんで俺の妹じゃないんだ！」

「お兄ちゃん！？さすがにそれは冗談でも傷つくよ！」

「大丈夫だ美香。もちろんお前が」

「お兄ちゃん／＼」

「二番目に良い妹だぞ！」

「一番目は誰…？美香、ちょっとオハナシシテクルヨ…？」

最後に片言になり、不気味な雰囲気美香のまわりに漂い始める。

「功くん、そろそろまずくない？なんか怖いんだけど…」

「美香が人間じゃなくなる前になんとかしてください！」

「（コクコクッ！）」

確かに口からおよそ呼吸とも思えないような変な音が聞こえてくる。さすがに冗談が過ぎたか？

「冗談だ、一番は美香に決まってるだろ？」

「本当？お兄ちゃん」

「多分」

「ホントウ？オニイチャン」

「本当だ、天地神明に誓ってもいい」

「私もだよお兄ちゃん！」

ふう、一瞬寒気がしたぜ。

「変な冗談なんか言わなきゃいいのにー」

「悪いな。これはもう癖みたいなものだ」

「まあ私は功くんのノリがいいところ好きだけどー」

「俺も恵と話したりするのは好きだな」

本心から思っていることなので、少し恥ずかしかつたが素直に口に出せた。

しかし似たようなことを言ってた恵は顔を真っ赤にして恥ずかしがっている。

「な、なんか恥ずかしくなってきたな」

「そ、そうだね！」

「」「」「」

中等部の三人からジト目で睨まれる。

もの凄く居心地が悪くなってきた。

「さて、クレープ食いに行くか恵！」

「そうだね功くん！」

大きさにテンションを高くして誤魔化すしかできなかった俺たちだった。

#3 いつもの風景。 3 (後書き)

本当に進まないです。

「好き嫌い」(前書き)

自分は鮎が嫌いです。

「好き嫌い」

功「あー目覚めるわー」

恵「まーたブラックコーヒー飲んでるの？」

美香「お兄ちゃん好きだねー」

功「飲むとスッキリするんだよな」

恵「苦いのにスッキリするかな？」

功「それは慣れの問題じゃないか？」

恵「私はいつまで経っても飲める気がしないよー」

功「恵ちゃんはお子ちゃまですもんねー？」

恵「私はいつまで経っても飲める気がしないよー」

功「こんなもの飲めても飲めなくても変わんないから気にしないでいいさー！」

美香「お兄ちゃん弱っー！」

功「殺されそうなほどのプレッシャーを感じたんだからしょうがないだろ？」

恵「そうなの？」(ニッコク)

功「自分の間違いに気づいたんだよ」

美香「お兄ちゃん…」

恵「ほらー馬鹿なことしてるからさすがの美香ちゃんも失望して」

美香「弱いお兄ちゃんも良いね!!」

恵「なかった?!」

功「嫌われないのは良いんだけど、素直に喜べないんだよな…」

恵「喜んでたらドン引きだよ…」

美香「なんでよー?妹に褒められた兄は喜ばないといけないんだよ?」

功「あれは褒められたのか?」

恵「美香ちゃんの兄の定義がすごく気になるよ…」

美香「別に普通だと思うけど」

恵「それはないよー」

功「ああ、ないな」

美香「聞く前に否定しないでよ!」

恵「じゃあたとえばなにかある？」

美香「兄は妹に隠しことをしてはならない」

功「俺のプライバシーはどこにある！」

美香「大丈夫だよ！お兄ちゃんのことは何でも知ってるから！」

功「すでないのか?!」

恵「まあさすがにそれはないと思うけど、じゃあ功くんの食べ物の好き嫌いは？」

美香「好きなのはチーズだよ。特に裂けれるチーズを裂かないで食べるのが好きなんだよね」

功「……………」

美香「それで嫌いなものはリンゴときのことウニで、他にもあるけど特にこの3個は苦手みたい。リンゴは気がついたら嫌いになってたけどリンゴジュースは飲めるって変だよな？きのこは味が徹底的に嫌いで、ウニは前プリンに醤油をかけたような味って聞いてから苦手になったんだよ！」

恵「…すごい詳しいけどあってるの？」

功「…全部あってる。しかも教えたことないことまで知ってる!!」

美香「言ったじゃん！お兄ちゃんのことならなんでも知ってるって！」

恵「冗談じゃなかったんだね…」

功「冗談であつてほしかった…」

恵「それにしてもねえー」

功「恵からもちよつと言つてやつてくれよ」

恵「裂けるチーズは裂きなよ？」

功「それはほつとけよ…!!」

「好き嫌い」(後書き)

ツナ缶は好きなんです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1856ba/>

笑い日和。

2012年1月6日23時47分発行